

岩淵谷の砂金

そもそも岩淵谷の名が、この谷についたのはいつごろかわかりません。三太郎少年の父は山仕事で暮らしを立てていたので、小さいときから父について色んな山に行って、手伝いをしていました。

三太郎はいつものように父について、いくつも谷にや丘を越えて岩淵谷の向かい側まできました。一休みして水を飲もうとしましたが、竹筒の水は来る途中飲んでしまったので、一滴もありません。

周りを見渡しましたが谷川はありません。三太郎は其の時、太陽の光に照らされて、向かい側の山に一筋銀色に輝いて水が見えます。

「おや、あそこに水があるぞ」

「お父さん、あそこに谷があって水が流れているらしいから汲んでくるよ」と駆け出そうとすると、父が

「三太郎待ちなさい。あれは水のように見えるが本当は水ではないのだ」といって次のような話を始めた。

「わしが子供の頃、お父さんと今日のようにこの辺まで来たが、父は決してあの水のように見える岩淵谷には近づかなかった。そしてこんな話をしてくれた」

「むかし、何人かの仲間があ谷に仕事に行ったそうだ。其の時には、あの岩淵谷には綺麗な水が流れており、さらにその谷のあっちこっちから砂金が採れたそう。みんな始めは共同で砂金を採り、お金にしてみんな同じように分けていたという」

「さてそこで、一人の悪賢い人が、全部自分のものにしようと、次々仲間を殺してしまった」

「殺された人達は、必ず復讐をしてやるといったそうだが、その悪人は、ふん、死んだ人に何が出来るというのじゃ、と行って恐れなかったという」



独りになった悪人は、ある朝弁当を一杯持ち、水納に水を一杯入れ岩淵谷へ行った。しかし、どこを探しても、いつものように谷は輝いていなかった」

「そこで、悪人はあっちこっちをめちゃめちゃに掘りまわったが、一握りの砂金も出なかった。陽は西の空に沈み、暗くなったので悪人は帰ろうとしたが」

「自分が掘ったところが、でこぼこで深く陰しく、もがけばもがくほど足をとられ、そこから出られなくなり、悪人はついに帰らぬ人となったような……その人が死んでから又、谷には昔のように、砂金が出てくるようになったという話じゃ」

三太郎は父の話を一生懸命聞いていました。すると父は

「三太郎、又砂金が出るようになったのは何故だと思う」

と聞きました。しばらくして又父は

「他人を押しつけてまで幸福になるな、なぜなら人間は動物と違うからじゃ」父はしばらくして

「三太郎よ、何故あの岩淵谷が元のようになったかというとな、貧しい人達のためを思って山神さんがあの谷に砂金をばら撒かれたのだよ」

「でも、独り占めしようなど、欲な事をする人がいたら神さんはばら撒かれないんだよ」

三太郎は話を聞いているうちに、岩淵谷に行ってみたくくなりました。

「お父さん、行ってほんの少し砂金を掘ってきてもいいじゃろう？」

すると父は

「そりゃあ、ほんの少しだったら山神さんも怒りはしないだろう。しかし、人間というものは、もう少しはよいだろうもう少しはと、欲が出てきて、時間が経つのも忘れて夢中になり、ついには蛇やトカゲや死んだ人の亡霊が出てきて永久に帰れなくなるものよ」

三太郎は話を聞くうちに恐ろしくなっていくのをやめました。

「今、あの岩淵谷が光っているのは、みんなの暮らしが楽になったからだ」

と思いました。現在では岩淵谷の砂金も、その下に祠があるといわれているが、その祠も無く。山の幸、石楠花、山百合、イワマツなどを大切にしようという話でしょう」